

危険な線路で

昭和六十二年 度 六年 女児

去年のことですが、お母さんに妹を保育園に迎えに行くのをたのまれて、学校のとなりの若浜保育園に行き、その帰りに妹をつれて歩いていました。

途中、線路の前まで来た時、けいほう機がカンカンと鳴りました。私と妹は立ち止まりました。列車が来たので、人と車だけの専用道路に寄って待ちました。しゃだん機が降りました。

「あっ。」おばあさんが線路の上でまごまごしています。私は思わず声を出して、

「こっち。」と呼びました。でも、おばあさんはあまりの興奮で見向きもしません。もう電車はガタガタいいながら、おばあさんの方へ近づいていきます。

もう九十五メートル位。あと七十メートル位。

「ああ……。もう、だめだ。」と私は心の中でさげびながら、電車の方をずっと見ていました。

「しゃがんで。おばあさん。あっちさ。」

おばあさんは、やっと向こうの方に行きました。そこに同じ若浜小学校の四年生の男の子達が、走ってきました。

「おばあさん。早く、そっちさしゃがめ。」

「電車くっさげ。あっち。」

「んだ。そごで、じっとしていれ。」

四年生の男の子達は、おばあさんにいろいろと指導してくれました。その声は、とても大きな声だったので、私にもよく聞こえました。

おばあさんは、大きくて重そうな荷物を持っていたので、荷物を持ってやりたかったけれど、どうしようもなかったです。私はあまりおばあさんに声をかけてやれなかったのです。でも、四年生の子供達は、まだあきらめないで、一生懸命に人助けをしていました。

ガタガタガタ……。だんだんと電車は、おばあさんから遠ざかっていきました。

おばあさんは、四年生の子供達のおかげで無事でした。もし、四年生の子供達が来なかつたら、おばあさんはどうなっていたでしょう。それに周りの人達だって、やっぱりいやだったろうし、周りの大人達は、誰一人とおばあさんに声をかけたりする人がなく、ふみ切のしゃだん機が上がってからも何もなかったような顔をして通りす

ぎて行ってしまったのです。

おばあさんが助かったのを見ると、四年生の男の子供達は帰っていききました。おばあさんは、その子供達に

「どうもありがとうね。」と言って、帰ろうとしました。

その時に私達にもおじぎしながら帰っていききました。

その後、私は何だかへんな気持ちになりました。見ると、四年生の子供達は、カバンをしまったままだったのです。それほどにあわててきたんだなと思いました。それに比べ大人の人は、冷たいような感じがしました。

私は、お年よりの人達など困っているのを助けたりしてやりたいです。そして、大人の人達はどうしてそんなに冷たいのか分りませんが、もっと思いやりを持って、誰にでもやさしくできないのかなと思いました。